



障害をもつ幼児の保育(4)

—この子と出会ったとき—

津守

真 (M)

津守

房江 (F)

歩くというのと その四

幼児期の大切さを語り合う—病院の待合室で—

病院の待合室で、私共はばったりとTくんとお母さんに会いました。

F 嬉しそうな顔をしておじぎをし、握手をして、お母さんもとっても喜びました。それぞれ診察を待つて

いる間に私たちは話をしました。その話をどうぞ。

M 待っている間に、私はTくんの隣りに行きまして。Tくんは自分から手を出してにこにこ笑って私に握手を求めました。お母さんは私にいろんなことを話しかけました。「家庭指導グループ（〇歳から幼児期の障害をもつ子どものための週二日のグループ）の時

のことが今の基礎になっていると思うんです。でも世間ではあまり認められていないけれど……」「今になつてみると、あの時のことがとても大事だったと思うんです。同じ年齢の同級生に出会つてみると……」とお母さんが言いました。

F 青年期になつたTくんとお母さんは私たちと過ごしたあの頃の幼児期のことをどう見ているのでしょうか？

M お母さんは、他の障碍の人を見ると、動きがぎこちない人が多くて、何か暗くて、うつむいてとほとぼ歩いているように見えると話しました。それに対してTくんは胸を張つて、いつも笑っている。私から見てもTくんはそのように見えました。「今、ご飯食べるようになってつたんですか？」と尋ねると、「今も偏食は多いけど、ご飯は結構食べます。でもあの頃何にも食べなくて、そして家庭指導グループに来ると「校長先生ーじいじ先生ー」の指をつかまえて歩き回つた。それがとっても嬉しそうでした。「あの指をつかまえて

あっちに行つたり、こっちに行つたり、ぐるぐる歩き回つて、そして先生がそれに応じて歩いたりして、大変だつたでしょうねえ」とお母さんが言うから「いや私はTくんについては、大変だなんて思ったことは一度もない」と言いました。Tくんは私の指をつかまえて、自分から歩いて、部屋の隅に行つてみたり、それからしばらく歩くと今度は中二階の上に乗まで上がつてみたり、そうやって私の方から言えば、Tくんが自分から行こうという能動性をどこまでも尊重することが彼を生かす道だと考えていました。私はそう思っていたから、Tくんが自分から「あっち行く、こっち行く」と言つても、お母さんの言によれば、「引きずり回されて三十分も一時間もあちこち歩いた」ことは全然大変ではなかつた。それでお母さんも「あの時のあれですよ」と、あのときの私を認めてくれました。

F 話は戻りますけれども、Tくんが校長先生ーじいじ先生ーの指につかまつてお母さんから離れて歩き始めたその前はどんなだつたでしょうか。私の印象で

は、後ろから押されなければ動けなかったように思う。それが何にも誘わない人の手を見つけたというところがね、あの頃の良かったことだと思う。こちらからエネルギーやパワーは一切出さないうで、ただ自然な手があった。その手に縋ってみようかなと、押されるのではなく、引つ張られるのでもなくて、一緒に歩き始めた。勿論Tくんは歩行出来たけれども、歩く気がし

Tくんが、三歳半ではじめて私共のところに来たころ、Tくんは歩行はできたが、自分から歩こうとしなかった。私がそつと手を出すと、Tくんは私の両手の指につかまり、私も腰を低くして、東京音頭や炭坑節やお祭り気分のリズムを歌った。他の子がそれに合わせていた。一時間くらい、同じ場所に立ったまま、私はリズムを歌い続けることよつて、Tくんと私との関係が保てるように思えて、ひたすら歌いつづけた。そのうち私が立ち上がつて足踏みをするよとTくんも足踏み

なかつたのよね。そして手につかまつて歩き始めた。

子どもが自由感をもつよつた保育―じい先生の指―

M ああの頃、きめ細かい保育的配慮のことを私は考えていたので、Tくんが歩くことを面白く思つていたので、かなり詳しくとつておいた記録があるので、家に帰つてから記録を取り出してみました。

をする。私が足を一步出すよとTくんも足を出した。そのうち私がトランポリンの回りを、Tくんの両手をとつて歩いた。やがて片手をつないでいれば平気になつた。弁当の所にも歩き、Tくんの行く方向に行くよつてもりで歩いた。衝立の穴をくぐつた。Tくんは何度もその穴をくぐつた。

私が少し庭にいこうとすると、Tくんは自分から一緒に庭に出て行つた。ホールの入口で中を見て立つていた。私はリズムをとりながら、片足を床に乗せると、そのうちに自分の片足をのせる。

しかし、私はそれ以上に中に入ることをしなかった。Tくんは、小雨の中を歩いて庭に行き、また保育室にいった。部屋の隅をのぞいたりした。私が腰掛けていると、Tくんはトランポリンの上の子どもを見ている。私の体がじまになると、そちらを覗き込む。私はのりおにぎりをもつてきてもらう。蓋をあげると、しめろと言う。そして自分で蓋をあげたり、しめたりする、手にご飯がついた。母は、こんなに離れたのは生まれて初めてだと言う。

帰りがけには、手を伸ばして、私に抱かれた。これは初めてである。今日一緒に歩いたことが、Tくんにとって私を理解者と思わせたのである。

一週間後

Tくんが来るところを迎えた。Tくんは、私を見ると、母から手を離して入り口から一人で歩いて、私に手を差し伸べてきた。私は、今日はTく

んは母から離れてひとりで遊ぶつもりになって来たのだと思った。

私は赤いレインコートを脱がせた。母は洋服も着替えさせるのだが、Tくんは私の両手につかまって、リズムと一緒に歩きはじめている。

トランポリンのまわりを、東京音頭、炭坑節を歌いながら、まわって歩いた。Tくんが行く方向に私はいくようにつとめていると、そのうちに衝立の向こうの部屋もぐるりと歩き、衝立の穴から出たりする。母のそばを通ってもそちらに行こうとしない。私と何度も歩く。片手をつなぐだけになる。そのうちあまり歌も歌わずに歩く。

私の手をつないでブリッジに出る。小雨が降っていて、じきにもどる。またいく。いったり来たりする。雨がやむとはだして庭に出て、水たまりにはいる。いくつも水たまりがあり、その中に入って歩いた。かなり十分に水たまりの中を歩いた。

自分から部屋に戻った。手で回す玩具に、私の手で回させる。じきに自分で何度もまわした。自分の手を自分で使うことがおもしろいようだ。玉をひとつずつ自分で動かす。

バスを自分で動かす。私が、パトカーやショベルカーを出すと、それを動かして見る。

自分の思うように動き、絵本をいじることの面白さをためしていた一日だった。小さなことでも自分でやれることがこの子に自由感を与える。いま味わいつつある自由感に対する喜び。

一週間後

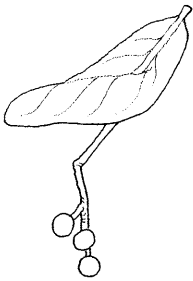
Tくんは、来ると、母にくっついていて。それでもしばらくして私の手を引くが母の手をも引く。

母がいうには、きのう訓練所にいったら、いままでのようにべったりとくっつききりではなかったという。今日は、私と歩くが母の手を離さな

い。どうも母と私が二人で関心をもちすぎるように思った。そこで、私は母と雑談をした。そうするとTくんの行動が鈍る。そして、私を呼ぶ。私はまた相手をする。雑談しながら、昨日訓練所で無理をしまして、子どもは無理をするのが一番良くないことが分かりましたという。

Tくんは意志の表現の仕方がこまかいから、小さなことを見逃しがちになることを話した。

母と私の三人で、庭に出た。音楽がかかっていた。Tくんはそのまわりを歩いた。はじめ私と手を引き、それから並んで歩くうち、Tくんが先頭になった。Tくんはひとりだけで歩き回った。



F これだけの細かい記録は読むだけで大変ですね。
M 実際にこれの何倍もの同じ様な行動とやりとりが延々と続いていたのです。

M こういう繊細な子はどの幼稚園にもいるでしょう。そのことがもう一番最初から分かったから、Tくんが小さな動きをするまでは私も自分から動かないで、Tくんの方からほんのちよつと動いたところをこつちが応えた、そこは私が非常に意識して細やかに気を遣ったことです。それはあの時期のTくんと付き合うときの大事な点だったと、今になっても私は思います。あの子の動かない様子はかなり極端だったけれど、ある程度はどの子どもにも言えることでしょう。自分から動いた小さな動きを敏感に察して応ずるのが必要なることを示してくれたのがTくんだったと思います。
F そうね。年月を経て後に記録を読むということとは、もう一度生き直すことになるのでしょうか。
M ボルノウは、「著者が自分自身を理解していた以上によりよく彼を理解する」ということは、いかなるこ

とか」という問いを出して、「読者は著者と同じように著者を理解するだけではなく、さらに著者が自分自身を理解した以上に彼をよりよく理解しなければならぬ」（以文社）と言っています。私共が自分が書いた記録を読むというのは自分が読者になることです。記録を記したときに自分が何を言いたかったのかを明かにすることは、私にとつていまの課題です。

非存在から存在を確かめる遊び

―もつと違った自分を期待する大人に抗して―

F その後あなたがあんまりTくんとかかわれなくなつて、引き受けたのが私です。

私もこれまでのことを見ていたから、なんとかしなきゃつていうようなパワーは出さない。ただ自分で動きたせばいいなあと思つて付き合っていたら、校長室と応接室に行つて、それで応接室のソファに座つて窓から外を見ていました。お昼になつてもヨーグルトの四分の一をやつと食べる。お母さんのために何とかし

て少しでも食べさせてあげたいと思ったけれど、本人が食べるということを拒否してたのね。そして体も小さいし、弱いし、これでどうなるだろうかと思っただけけれども、そのうちに何かの拍子で階段を上がって二階へ行きました。二階には他の子は来なかったから、比較的静かな空間で一番奥の部屋は特に静かで、そこでTくんと私と二人つきりですつと過ごすことになりました。それは一時間とか二時間というものじゃなくてね、もう朝から帰るまでその奥の部屋で過ごすことになって、そしてTくんは自分の顔を伏せて「ない、ない！」って、言うのです。Tくんが「ない、ない！」と言うとね「あれ、Tくんいないぞ。どこ行っただ？」って、私が探すわけ。そして少ししたつともう、おかしくしておかしくてたまらないっていうようにして、フツと顔を上げてね「いたー」っていう、存在と非存在の間を揺れるっていう遊びを二時間も三時間もやる。

F 自分の存在を消したいというような思いと、でも

探し出して愛して欲しいっていうその間をあの人は揺れたように思う。だけどそのときの私にはTくんの気持ちがよくわからないので、それにつきあうのは本当にね大変でした。他の子を全然見ることができなくて、あの子にだけ向き合っていました。

M そうしないとTくんは承知しなかった。

F Tくんは他の子が来ると他の部屋に逃げて行くことになったから、あときは私にとっては本当に忍耐のいるときでした。「ない、ない」っていう否定の言葉だけが出てきて、何にも肯定の言葉が出てこない。それを長い期間やったと思う。そして「ああ、あれは本当に辛かった」って、何かの研究会のとときに言ったら、「F先生はあれが好きでやってるんだと思った」ってスタッフの人から言われたときにはね、ちよつとショックを受けた。でも考えてみると、外からは楽しそうに見えるくらい、自分の心を励まして、明るく、陽気にやらなければTくんの非存在に自分まで一緒に巻き込まれて非存在になってしまうというように危機

感を感じながら誰もいない部屋で二人つきりでした。

M 週二日ずつです。ね。

F そう、食べる物は小さなヨーグルトだけで。

M 今日もそのことを思いだして「あの頃お母さんはもう、狭い目の前のことしか見えなかったからね」って、私が言ったら、お母さんは笑って「ほんとにそうですよね。ほんとに一筋のせまい所しかみつめてなくって、そしてあっちこっちの相談所や施設に行っていましたよね」ってお母さんがそう言っていました。

F そういう反応をしたTくんというのは、自分が存在しなきゃいけないみたいに思っていたのかもしれない。でも非常に愛されてた。このままで愛されたんじゃなくて、何か期待されて変わった自分であつたらもっと愛されるだろう、そう思うからあの人は大変だったと思う。

F それを一年以上やったことはね結構大変だったのよ。他の元気な男の子が、裏の部屋の静けさに惹かれてバタバタバタッって飛び込んでくることがありま

した。それがきっかけで

「Tくん、さあ逃げよう」

とか言って、そしてTくんと抱いてとつことつこととドラマのようにして逃げる格好をしました。それを受けて誰か男の先生が追いかけてくれたのね。そして

「大変だー。逃げる、逃げる」とか言ってホールへ出たの、そうやってやつとホールへ出て奥のやぐらに入って隠れるわけ。でもそこに誰かが入って来ちゃう。「ほら、逃げろー」って言ってるね、今度はね、存在、非存在ではなくて存在しながらみんなの中で身を守るっていうようなことをやるようになったんです。

そのときは考えていたわけではないけれども、私はそれを陽気にやった。そのときに、Tくんは「ギヤァー、ギヤァー」ってね「逃げろー、逃げろー」っていうような感じの声をあげた。それがとても楽しくてそうやって



るうちに、若い男の先生の手にもつかまるようになってきた。はじめは若い男の先生なんてとんでもないっという感じだったのがこの遊びによって人に対する心が広がったと思う。

M この経過を見ると、一番最初受けたのは私で、そのうちに私がどういうわけだかもTくんの所に留まれなくなった。それであなたがその後を受け、やがて若い男の先生が一緒にかかわることになった。そのことを考えても、こういう子どもの保育は一人ではやりきれなくて、ある程度長い期間にわたって何人かの人で臨機応変に、そのときに出会ったところで展開していくことが、保育の大事な点でしょう。

「主体的に歩く」から「主体的に生きる」へ

F 私はあなたが幼い子と付き合うのを見たり、何人かの親子と出会って、手のつなぎ方を見るようになりました。その中には子どもと大人との関係の在り方が見えるのです。幼い子の手首をがっちり握って自由

を奪うような手のつなぎ方もあります。もちろん道路に飛び出さないようにという配慮もあるでしょう。しかし、ある父親が足腰に不自由のある子が、ころびそうになりながらも自分で歩き始めたとき、「これだけが揺れるのだから、手をつないでしまったらこの子は自分らしく歩けないでしょうから、自由に歩かせてください」と言われたことは忘れません。手をつないで歩くことが、その子を支えるつもりが、いつのまにか親も教師も、子どもの主体性を奪う恐れがあることに気付かされました。

Tくんのお母さんが、「JーJ先生の指」と言っていることも大切なことを指摘しているように思えます。「手」ではなくて「指」と言うとき、こちらのパワーは十分の一になるのですね。パワーを抑え、大人の在り方について考えさせてもらいました。

M そのことがあるときもつと言いたいと思っただけ話し足りなかったことだったと思います。